

継続的家庭訪問による学生の学びと高齢者の生きがい創出 —UR あけぼの団地で実施された「教えて人生の先輩」プロジェクトの評価—

本田 光¹⁾, 山田 信博²⁾, 林 匡宏³⁾,
藪谷 祐介⁴⁾, 中田 亜由美⁵⁾

¹⁾札幌市立大学看護学部, ²⁾札幌市立大学デザイン学部, ³⁾株式会社 commons fun,

⁴⁾富山大学学術研究部芸術文化学系, ⁵⁾札幌市立大学*

抄録：本プロジェクトでは、団地に居住する高齢者2人に対して看護学部生2人が2020年10月～2021年1月の期間において、計4回にわたって継続的に家庭訪問を実施した。本研究の目的は、学生による継続的な家庭訪問を通して学生が得た学びと高齢者にとっての意義を明らかにすることである。研究方法は質的記述的研究とし、学生と高齢者それぞれにインタビューを行い、その逐語録をデータとして分析を行った。プロジェクトを通じた学生の学びは、【コミュニケーションの能力形成に向けた試行錯誤】、【団地に暮らす高齢者の暮らしの理解】、【高齢者の価値観に触れる体験からの気づき】、【学生の手ごたえや達成感】、【2人ペアでのチームワークの醸成】の5つの項目で整理された。学生との交流で得た高齢者における意義は、【学生の訪問から、高齢者との交流では得られない未来志向性を得た】、【学生との交流は、私の“生きがい”を思い出させてくれた】、【次の時代を担う若者の成長に貢献する機会がもてて嬉しい】の3つのカテゴリで説明された。看護学生による継続的な家庭訪問は、学生にとっては高齢者におけるウェルネスを学ぶことに有効であり、高齢者にとっては生きがい創出の機会になっていた。本研究の成果は、大学の特徴や強みを活かした地域貢献のあり方についての一考に貢献するものでもある。

キーワード：継続的家庭訪問, 看護学生, 高齢者, 公営団地, 教育効果, 生きがい

Students' Learning and Creating a Purpose of Living on Older Adults By the Continuous Home Visits Project: Evaluation of the “Teach Me! Seniorities in life” Project Implemented at the UR Akebono Public Housing Complexes

Hikaru Honda¹⁾, Nobuhiro Yamada²⁾, Masahiro Hayashi³⁾,
Yusuke Yabutani⁴⁾, Ayumi Nakata⁵⁾

¹⁾School of Nursing, Sapporo City University, ²⁾School of Design, Sapporo City University, ³⁾commons fun,

⁴⁾Faculty of Art and Design, Academic Assembly, University of Toyama, ⁵⁾Sapporo City University

Abstract: In this project, two undergraduate nursing students conducted four continuous home visits (face-to-face) with two older adult residents who lived in the housing complex from October 2020 to January 2021. This study aimed to determine what the students learned and gained through their continuous home visits and its significance on the older adults. The research method was a qualitative descriptive study, in which the researchers interviewed the students and older adults. Their verbatim transcripts were analyzed as

*専門研究員

data. The students' learning through the project was organized into five categories: "trial and error in forming communication skills," "understanding the lives of the older people who lived in housing complexes," "awareness from the experience of being exposed to the values of older people," "students' sense of accomplishment", and "fostering teamwork in pairs." The significance of the interaction with the students for the older adults was organized into three categories: "The students' visit gave me a future orientation that I cannot get from interacting with older adults," "The interaction with the students reminded me of my "purpose of living," and "I am glad to have the opportunity to contribute to the growth of young people who will lead the next generation." Continuous home visits were effective for the students to learn regarding wellness in older adults, and for older adults to create a sense of purpose in their lives. The results of this study may contribute to a consideration of social contribution by utilizing the resources and strengths of the university.

Keywords: Continuous home visits, Nursing students, Older adults, Public housing complex, Educational effectiveness, Purpose of life

1. 緒言

プロジェクトのフィールドとなったUR あけぼの団地は、住戸数1,240戸を有する大規模な団地である。あけぼの団地の高齢化率は49%を超え、階段の上り下りを要する上層階を中心に空き家(32%)も目立つ。また、団地入居者の減少と共に入居者の高齢化も重なり、さらに築50年という団地の歴史における入居者の入れ替わりに伴い、団地内におけるコミュニティの脆弱化は喫緊の課題となっている。UR あけぼの団地においては、自治会を中心に様々な取り組みが行われているが、団地内の有志の取り組みだけでは限界がある。

そこで、筆者らは、UR あけぼの団地において、2018年¹⁾および2019年²⁾に団地自治会および有志の住民と共につくる年1回の交流イベント「あけぼのテラス」を主催し、その活動の一環として出張まちの健康応援室を実施してきた。

この一連の活動を通して、住民の方々と団地における課題を共有してきたところ、住民からは、孤独死の予防も視野に入れた見守り活動を推進しながら、住民のお互いが道で出会ったときには自然にあいさつを交わせるような温かいコミュニティをつくりたいという要望が挙がった。またアンケート調査からも、日常生活で感じる住民の不安として、「有事の際の対応」、「健康」、「単身生活」を挙げる者も多く、保健や福祉に関するニーズがあることも分かった³⁾。しかし、これまで行ってきたイベント型の企画ではアプローチが難しい住民もおり、このアプローチ困難層におけるニーズ

を把握することを通して、うまく地域活動につないでいく手掛かりを得たいと考え、アウトリーチ^①型の活動を計画することになった。

今回、実施したアウトリーチ型の活動とは、1回限りの家庭訪問ではなく、2020年10月～2021年1月の期間に計4回の家庭訪問を通して同じ学生が同じ対象者に面会するという信頼関係構築型を志向したプロジェクトであった。本プロジェクトの名称である「教えて人生の先輩」プロジェクトとは、プロジェクトを終えた学生が、その体験をもとに命名した名称である。

本研究の目的は、この「教えて人生の先輩」プロジェクトの評価として、学生による4回の家庭訪問を通して学生が得た学びと高齢者にとっての意義を明らかにすることである。

なお本プロジェクトは、COVID-19拡大のため、学生および高齢者ともに少人数での実施となった。また一部オンラインを活用した面談を実施している。その為、本稿においては在宅の高齢者との遠隔での面談も含めて、家庭訪問として記す。

2. プロジェクトの概要

プロジェクトは、2020年10月～2021年1月の期間に月1回の計4回、同じ高齢者に対して同じ学生が継続的に家庭訪問した。プロジェクトを通して効果のねらいとして、学生にとっては、団地に暮らす高齢者の実態や困りごとなども含めた

ウェルネス⁽²⁾支援を学ぶ機会となり、地域志向マインドを育む学習の機会になることを期待した。高齢者にとっては、次代を担う若者の学びに貢献する機会となり、社会参加と生きがい創出の一助となることを期待した。

団地自治会と研究者らとは、これまでにいくつかのプロジェクト企画を通して良好な関係性を築いてきたが、特に今回の家庭訪問プロジェクトに向けた企画については、2020年7月から具体的な打ち合わせを開始した。団地自治会の他に関係機関(者)は、見守ろう会(団地有志のボランティア活動団体)、民生児童委員、南区第3地域包括支援センター、南区社会福祉協議会、UR都市機構、URコミュニティが会議に参加した。

プロジェクトの対象とする高齢者像は、上記の打ち合わせ会議を重ねて、団地自治会や見守ろう会による「普段の活動を通して、心配し、気にかけている高齢者」とした。そうして今回のプロジェクトで対象となった高齢者は2人であり、団地自治会と見守ろう会を兼務する1人からの紹介であった。対象となった高齢者には、事前に教員が高齢者2人と面接し、プロジェクト内容について説明した。併せて高齢者と学生の双方が安全に家庭訪問を継続できるよう配慮して、認知面を含めた健康状態が良好であることを確認した。なお、対象となった高齢者の氏名や住居等の情報は対象者のプライバシーに配慮して、団地自治会をはじめ関係機関(者)には匿名とし、その進捗状況や成果のみを報告している。

家庭訪問を担当した学生は、A大学看護学部4年生で保健師コースを履修する2人であった。学生のリクルートにあたっては、保健師コースを履修する全員にプロジェクトの案内をして、参加を申し出た学生とした。

4回の家庭訪問のうち、後半2回は、COVID-19拡大の影響のため、LINEを活用してオンラインにより実施した。LINEの使い方は、2回目の家庭訪問で学生が説明とリハーサルを行った。1回目から4回目にかけて学生が実施した主な内容を表1に示す。各回において血圧測定および体温測定を実施し、健康状態を確認した。

家庭訪問の主な内容は、1回目には、高齢者より今後の心配ごとの話を聞き、その中で出てきた成年後見人制度について、学生は高齢者から質問を受け、2回目の訪問までの宿題となった。2回目の家庭訪問では、抹茶の点て方を教わり、1回

目からの宿題であった成年後見人制度について学生から説明した。3回目はオンラインでの家庭訪問となった。学生はオンラインでできる体操を事前に準備しており、実施した。その後、学生は高齢者から「幸せホルモンというのをテレビで見たのですが、何ですか」、「認知症予防には何をしたら良いですか」等の質問を受け、Webサイトで検索しながら回答していた。また、3回目から4回目にかけては高齢者の身の上に関することや学生の今後の人生計画、恋愛に関する話題など、よりプライベートな話題へと深まっていった。教員は、同じ教員が4回を通して同席し、必要に応じて学生と高齢者との会話をサポートした。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

本研究は、インタビュー内容をデータとする質的記述的研究である。

2) 研究対象

研究対象は、家庭訪問を実施したA大学看護学部4年生2人と家庭訪問の対象者となった高齢者2人である。

3) データ収集方法

プロジェクト評価のためのインタビューは、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューで、学生には2021年2月に1回のグループインタビューをオンラインで行い、高齢者に対しては2021年3月に個別インタビューを対面で実施した。インタビューは、プロジェクトに同行した教員1人が実施した。

学生には、継続的な家庭訪問を重ねたことで得られた体験とその学びの深化を明らかにするために、1回目の訪問から4回目まで各回のエピソードと共にその体験について尋ねた。高齢者には、プロジェクトに参加した高齢者にとっての意義を明らかにするために、思い出に残るエピソードとその時の気持ち、プロジェクトに参加した感想について尋ねた。

4) 分析方法

インタビューから得た音声データから、逐語録を作成した。分析は、逐語録のデータから学生の

表 1 プロジェクトの内容と家庭訪問を経験した学生の学びの時系列的特徴

プロジェクトの内容		学生の学び					
回数	手段	面談の主な内容	①コミュニケーションの能力形成に向けた試行錯誤	②団地に暮らす高齢者の暮らしの理解	③高齢者の価値観に触れる体験からの気づき	④学生の手ごたえや達成感	⑤2人ペアでのチームワークの醸成
1	訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・血圧測定/体温測定 < 主な話題 > ・自己紹介 ・お互いの趣味の話 ・後見人制度について 	<p>「教員と高齢者との会話の様子をみて学んだ」</p>	<p>「病院で患者として出会う高齢者とは違う」</p> <p>「団地に暮らす高齢者の困りごとと気づく」</p>	<p>「大切な人を亡くして独りになったとしても、前を向いて生きていく」</p>	<p>「他人の家に上がらせてもらうことに対する緊張感があった」</p> <p>「看護学生として何かをしなければ！と気を張っていた」</p>	<p>「Aさんが、まず仏壇にちゃんとご挨拶しているのを見て、そうするんだと学んだ」</p>
2	訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・血圧測定/体温測定 < 主な話題 > ・お茶の点て方 ・後見人制度について説明 ・学生をバス停まで見送りながら近隣環境について 	<p>「準備してきた情報を切り出すタイミングが難しかった」</p> <p>「調べてきたことをただ伝えるだけでは、期待に応えられていないと感じた」</p>	<p>「高齢者は、チラシで情報を得るので得られる情報には限りがある」</p> <p>「高齢者がスマホを使えることへの驚き」</p>	<p>「看護師って大変でしょ？ どうしてそんな仕事につきたいの？ と聞かれ、対象者からの踏み込んだ質問に驚きつつも心理的距離の縮め方を学んだ」</p>	<p>「思っていることをうまく伝えることができなかつた」</p> <p>「良い看護師/保健師になって欲しいと期待されていることを感じた」</p>	<p>「私は話を聞くので精一杯だったので、Aさんがよく話していて、すごいなと思った」</p>
3	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン体操 < 主な話題 > ・日本の高齢化率について ・幸せホルモンについて ・認知症予防について ・高齢者の身の上話 	<p>「沈黙をつくらないように努めた」</p> <p>「会話のきつかけづくりのために体操を準備した」</p> <p>「前回聞いた話を踏まえた会話の展開を心がけた」</p> <p>「相手が知りたいことを確認しながら情報提供できるようにしてきた」</p> <p>「次に会う理由や話題を探しながら会話を展開」</p> <p>「自分から自己開示していかないと相手も見せてくれないと感じたので、思い切って聞いてみた」</p> <p>「高齢者の気持ちを察するように心がけた」</p>	<p>「料理教室や運動の会に参加して仲間づくりをしていて、外出の機会の意味を知った」</p> <p>「健康な人にも不安はある」</p>	<p>「準備した体操と一緒に楽しく実施できてよかった」</p> <p>「私たちのことを信頼して、学びになればと身内の不幸の話もしてくれている気が伝わってきたので、どう受け止めたら良いのか迷った」</p> <p>「次に会うことが楽しみになる、その気持ちを共有できることも楽しい」</p>	<p>「Aさんが対応力あって、自然に会話を進めてくれるので、その間に私は質問されたことを調べたりできるので、リラクセスして対応することができた」</p>	
4	オンライン	<ul style="list-style-type: none"> < 主な話題 > ・今後の人生計画について ・恋愛について 	<p>「沈黙をつくらないようにと、しゃべり続けていたけれど、沈黙があっても耐えられるように！と思うようになった」</p> <p>「学生という立場だから許されるといような雰囲気を感じながら話せるようになった」</p>	<p>「支援が必要か否かの2択ではない」</p>	<p>「結婚の話題を投げかけたら、逆に聞き返されて、女性も多様な生き方を選べる時代と言われた」</p> <p>「上手に老いるということを知った」</p>	<p>「相手も喜んでくれていることを感じる事ができた」</p> <p>「『大丈夫、頑張っ』と送り出してくれる心のよりどころになった」</p> <p>「何かお礼の気持ちをお返ししたいと思っ、手紙を書いて送った」</p>	<p>「Bさんは、将来の保健師就職に活かそうという姿勢で参加しているのも伝わったし、偉いなと思った」</p>

学び及び継続的に学生との交流を持つことの高齢者にとっての意義に関係する記述をコードとして抽出した。

学生の語りの分析は、逐語録の通読を重ねて学生の学びの深化がみえる5つの項目を見出し、学生が1回目から4回目へと家庭訪問を重ねるに従い、学びの深まりや高齢者との関係性構築の進展が分かるように時系列で整理した。

高齢者の語りの分析は、高齢者における本プロジェクトの意義という観点から、抽出されたコードの関係性について相互に比較検討しながら、サブカテゴリおよびカテゴリへと抽象化した。

5) 真実性の確保

分析した結果は、インタビューに参加した高齢者1人と共有し、研究者による解釈が妥当であるか確認した。また、プロジェクトを共に企画した共同研究者間において合意を得た。

6) 倫理的配慮

インタビューにあたって、学生には家庭訪問に同行した教員とは別の共同研究者から改めてその意向を確認した。また学生の負担感に配慮して、グループインタビューの形式を採用した。高齢者に対しては、最終的家庭訪問を終えてから1か月程度の検討の期間を確保して、改めて研究参加の意向を確認した。

インタビューへの協力者には、文書と口頭で研究の趣旨および倫理的配慮について説明し、文書にて同意を得た。本研究は、札幌市立大学倫理委員会の承認(No.2025-1)を得ている。

4. 結果

インタビューに要した時間は、学生(グループインタビュー)113分間、高齢者(個別インタビュー)平均57分間であった。学生は、2人とも20歳代で女性であった。高齢者は、2人とも70歳代で女性であった。団地での居住歴は、約6年と約49年で1人は独居、他は配偶者との2人暮らしであった。

1) 学生の学び

プロジェクトを通じた学生の学びは、コードの分類により5つの項目に整理された(表1)。以下

に、コードは「」で示して説明する。

(1) コミュニケーションの能力形成に向けた試行錯誤

1回目の家庭訪問では、学生は相手の家でどのように振舞ってよいのか、どのように話を切り出してよいのか戸惑い、「教員と高齢者との会話の様子をみて学んだ」と語っていた。2回目には事前に調べてきた成年後見人制度について、どのタイミングで切り出せばよいのか分からず、業を煮やした高齢者の方から尋ねられて説明しており、「準備してきた情報を切り出すタイミングが難しかった」と感じていた。3回目には、「自分から自己開示していかないと相手も見せてくれないと感じたので、思い切って聞いてみた」と、会話のイニシアティブをとるという行為に変化が見え始め、4回目には、「学生という立場だから許されるというような雰囲気を感じながら話せるようになった」と、家庭訪問というアウェイな場における対象者とのコミュニケーションに対して、学生は自信をもって臨めるようになっていた。

(2) 団地に暮らす高齢者の暮らしの理解

学生は家庭訪問を経験することにより、「病院で患者として出会う高齢者とは違う」ことに気づき、灯油の購入と居室までの持ち運びが大変であるという話を聞き、「団地に暮らす高齢者の困りごと」に気づく」体験をしていた。3回目の面談の際には、「健康な人にも不安はある」ことに気づき、4回目には、地域で暮らす高齢者は「支援が必要か否かの2択ではない」と捉えるようになっていた。

(3) 高齢者の価値観に触れる体験からの気づき

学生は、「大切な人を亡くして独りになったとしても、前を向いて生きている」と感じながら、高齢者が話してくれた身の上話を聞いていた。2回目には「看護師って大変でしょう？ どうしてそんな仕事につきたいの？」と学生の個人的な考えを聞くような質問を受け、対象者である高齢者に会話のイニシアティブをとられることに戸惑いを感じながらも相手との心理的な距離感の縮め方を学んでいた。3回目、4回目には、話題もより個人的な考えや価値観を話し合うような場になり、「高齢者が役割を持って素晴らしいという表面的なことではなく、地域とのつながりやその中で役割関係、思いやりなどの実際を知ることができた」と語り、「上手に老いるということを知った」と、高齢者の人柄や価値観を感じとっていた。

(4) 学生の手ごたえや達成感

学生らは当初、「看護学生として何かをしなれば！」と気を張っていた状態にあった。しかし2回目の面談の際には「思っていることをうまく伝えることができなかつた」と振り返りつつも、「良い看護師／保健師になって欲しいと期待されていると感じた」と語り、学生の気持ちは何かをしてあげるといふ思いから相手の期待に応えたいという思いに変わりつつあった。3回目には、「次に会うことが楽しみになる、その気持ちを共有できることも楽しい」と語り、4回目には「相手も喜んでくれていると感じることができた」と、学生は家庭訪問に手ごたえを感じていた。

(5) 2人ペアでのチームワークの醸成

高齢者との面談は学生2人ペアで実施された。そのため、「Aさんが、(家庭訪問した際に)まづ仏壇にちゃんとご挨拶しているのを見て、そうするんだと学んだ」のように、学生はお互いの立ち振る舞いを見ながら学びあい、「Aさんに対応力があって、自然に会話を進めてくれるので、その間に私は質問されたことを調べたりできるので、リラックスして対応することができた」など、お互いに助けあっていた。4回目には、「Bさんは、将来の保健師就職に活かそうという姿勢で参加しているのも伝わったし、偉いなと思った」と仲間を尊敬する気持ちも育んでいた。

2) 高齢者にとっての意義

学生の継続的な家庭訪問は、高齢者にとってどのような意義があったのか分析した結果は、8つのサブカテゴリと3つのカテゴリで説明された(表2)。下記に3つのカテゴリについて説明する。サブカテゴリは<>で記す。高齢者の生の語りは斜体で引用する。

(1) 学生の訪問から、高齢者との交流では得られない未来志向性を得た

このプロジェクトの対象となった高齢者は、学生による家庭訪問を通じた交流を<他人と話す良い機会になった>と感じていた。また継続的な家庭訪問を重ねながら、学生の人柄を知り、将来の夢などを聞くことを通じて<学生さんと話せて、高齢者との会話では得られない元気をもらえた>と感じており、<学生の訪問が楽しみになった>と語った。高齢者の語りを下記に示す。

若い人の前には世界が広がっているんですから、(中略)相手がお年寄りだと、「もうこの歳になって…」という話になってしまいがちですけど、学生さんはこれからだと思ふから、思い切っけて言っけてあげられる、何か気持ちが良かったですね。

(2) 学生との交流は、私の“生きがい”を思い出させてくれた

ある高齢者は、早くに亡くした自分の子どもと同じ年頃の学生との交流を通じて、昔によく焼いていたパンのことを思い出し、再挑戦していた。また他の高齢者は、サービス付き高齢者住宅のことを学生と情報交換したことをきっかけに、自ら見学に行ってみようという行動を起こしており、<私にも「まだできるんだ！」と自信が持てた>と語っていた。またパンを焼くことについては、そのことがきっかけで、<学生の訪問は、旧友との話題の1つにもなった>と、他での交流の促進にも貢献していた。またサービス付き高齢者住宅の情報について、高齢者は新聞と共に届くチラシから得る情報しか知らず、入居に係る費用の相場等が分からず困っていた。そこで、学生は高齢者が持っていたスマートフォンに注目し、その場で検索方法を教え、一緒に検索したことで、高齢者は<スマホを使って自分でも調べものができるようになった>と喜んでいて、高齢者の語りを下記に記す。

子どもの話を聞いてくれるって、やっぱり嬉しいですよ。子どもが生きていた頃には、よくパンも作っていたけど、もうしばらく辞めちゃってね、でも、学生さんが来るからもう一回パン焼いてみようかと思ってやってみたら、「ああ、私まだできる」っていう気持ちが沸きましてね、嬉しかったですよ。

(3) 次の時代を担う若者の成長に貢献する機会がもてて嬉しい

プロジェクトに参加した高齢者らは、<この交流を通じた学生さんの成長に期待していた>と、人生の先を歩む先輩として、他世代の人々との交流における態度や心構えなど、学生の気づきを促し、看護師としての成長に期待を寄せていた。こうした次世代の育成に対する期待は、<自分も若い頃に年配の人にお世話になったので、こうした親切が次世代につながれば嬉しい>という動機からであり、学生との交流はこのような高齢者の気

表2 学生との継続的な面談に対する高齢者にとっての意義

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
学生の訪問から、高齢者との交流では得られない未来志向性を得た	他人と話す良い機会になった	団地では、なかなか他人と話す機会がなかった
		亡くなった娘のことは誰にでも話せることではなく、そんな話も学生さんが聞いてくれて、気持ちが落ち着いた思いになれた
		娘のことを聞いてくれて、うれしかった
		若い人の考え方や価値観に触れてみた
		えー、女の子ってそう思っているんだと驚いた
	学生さんと話せて、高齢者との会話では得られない元気をもらえた	娘が亡くなってから、全然、外に出ていない時期でもあったから、学生さんに会えて、元気をもらえた
		私もまだまだ頑張らなきゃという気持ちになれた
		行動的な学生の人柄に触れて、すごいなと感心した
		学生の人柄をみて、この人はこういう性格の人なんだなと思いながら話していた
		若い人と話をするのは刺激になる
		若い人の笑顔をみると、こちらも明るくなる
		未来を向いている学生と話をするのは、高齢者同士の話とは違って楽しい気持ちになれる
	高齢者に「なんでもできる！」と言っても、「この歳になって…」となってしまうが、若い人には遠慮なく言ってあげられる	
	学生の訪問が楽しみになった	学生が手紙を送ってくれたことがあり、嬉しかった
		もっと長い期間、継続したお付き合いをしたいと思った
せっかくの機会なので、またこうした機会があれば協力したい		
あけぼのテラスで健康測定をした学生との出会いを思い出し、つながった 次の訪問が楽しみだった		
学生との交流は、私の生きがいを思い出させてくれた	私にも「まだできるんだ！」と自信が持てた	子どもが生きていたころによく焼いていたパンに再挑戦してみようと思うようになり、やってみたら「ああ、私できるんだ」と思い出すことができた
		パンを焼く「生きがい」を思い出させてくれた 学生への質問で背中を押されて、自分でもサ高住に見学に行ってみることができた
	学生の訪問は、旧友との話題の1つにもなった	料理クラブの友人に、（学生が来るので）パンを焼いてみることを相談して、励ましてもらった
		「うまく焼けた？」と料理クラブの友人が声をかけてくれたりと、学生の訪問が友人との話の話題にもなった
	スマホを使って自分でも調べものができるようになった	調べものもスマホで調べてくれたり、スマホの使い方を教えてくれた
	次の時代を担う若者の成長に貢献する機会がもてて嬉しい	この交流を通じた学生さんの成長に期待していた
そんなに引っ込み思案だったら、これからやっていかれんぞ！という思いで言ってあげた		
学生さんは発表するのが普通だと思うんですけど、私らの前で緊張するっていうのが不思議だなんて思って		
学生さんに心配してもらおうプロジェクトではなく、学生さんを育てるプロジェクトだと思って参加した		
自分も若いころに年配の人にお世話になったので、こうした親切が次世代につながれば嬉しい		年寄りだって、今日だけでない、未来に向かっていこうという気持ちはどんな年寄りでも持っているということを伝えたかった
		自分も若いころに、年配の人にお世話になったから、その恩返しができればと思って協力した
自分も若いころに、年配の人にお世話になって、色々なことを教わったのを思い出した	学生さんも自分が中年になったときに、今回のことを思い出してくれて、次の世代に恩返ししてくれるようになってくれればうれしい	
何回かしか会えなくても、何十年後に思い出してくれたら嬉しい		

持ちを満たす機会にもなっていた。高齢者の語りを下記に記す。

私も若い頃には、80歳とかのおばさんに魚の煮付け方を教わりましたものね。今度は、逆に若い子に教えてあげているという思いですね。

5. 考察

1) 継続的な家庭訪問による学生の学び

家庭訪問の第1回目から4回目のそれぞれのエピソードと共に学生の学びについて得られたコードは5つの項目に整理された。

まず、コミュニケーションの能力形成に向けた試行錯誤と学生の手ごたえや達成感について考察する。第1回目の訪問の際に学生は、「看護学生として何かをしなければ!と気を張っていた」というように、学生という身分でありながらも親戚のおばさんに会うのとは違う、いわばセミプロのような気概を持ちながらの家庭訪問ではあった。しかしながら、実際のコミュニケーションは「教員と高齢者との会話の様子をみて学んだ」という技術レベルからのスタートであり、2回目の家庭訪問でも未だ「準備してきた情報を切り出すタイミングが難しかった」など、会話のイニシアティブのとり方に苦戦している状況があった。

川田ら⁴⁾は、近年の学生の生活背景として、核家族化が進み、兄弟姉妹も少ない家庭環境や同世代との交流が中心の暮らしの中で育ってきた世代における、他世代とコミュニケーションを図り、その場その時に応じた適切な行動をとるという社会的スキルの未熟さを指摘している。学生らは面談の手ごたえとして、「良い看護師/保健師になって欲しいと期待されていることを感じた」と、高齢者との間に築かれつつある信頼関係を実感しながら家庭訪問を重ねるごとに、思い切って会話のイニシアティブをとってみる挑戦を重ねることができていた。4回目には、「学生という立場だから許されるというような雰囲気を感じながら話せるようになった」と語れるほどに、学生らは自信をつけていた。

細川ら⁵⁾は、学生に身につけさせたい態度として、「対象者の生活様式・価値観にあわせた行動ができる」、「信頼関係形成に向けた行動ができる」、「礼節を重んじることができる」、「主体的に

学ぶことができる」、「医療人としての倫理性を遵守できる」を挙げている。本プロジェクトの特徴として、正規のカリキュラムにおける臨床実習とは異なり、学生に課題は与えられていない。そのため学生は家庭訪問を通じて、自分たちに求められていることを察して、「次に会う理由や話題を探しながら会話を展開した」のように、事前に準備して次の家庭訪問に臨むという主体性が自然に育まれる結果になったと考えられる。本プロジェクトは、単にコミュニケーションスキルの向上だけでなく、学生が主体的に支援の対象者との関わりを築いていくという看護専門職として重要な態度を涵養することにも有効であった。

次に、団地に暮らす高齢者の暮らしの理解と高齢者の価値観に触れる体験からの気づきについて考察する。学生は1回目の家庭訪問の際には、臨床実習で赴く病院や介護施設等で出会う高齢者像とは違う“健康な”高齢者との出会いから素直に「病院で患者として出会う高齢者とは違う」と感じていた。そして、団地の階段の上り下りの大変さや掃除・除雪当番、灯油の購入方法とその管理など高齢者にとっては工夫を要する団地での生活の実際を知った。「あけぼのテラス」の際に実施されたヒアリングでも、団地の浴槽での入浴の不便さや洗濯スペースの不足など団地生活の不自由さが聞かれている⁶⁾が、家庭訪問によって、学生がその実際の様子を目にすることができ、実感を伴って高齢者の暮らしを理解することができていた。

さらに「高齢者は、チラシで情報を知るので得られる情報には限りがある」と、情報弱者ということの実際を知り、高齢者が持っていたスマートフォンで、一緒に検索するなど、学生なりに支援を工夫していた。こうした交流を通して学生は、「健康な人にも不安はある」と気づき、地域で生活する高齢者にとって「支援が必要か否かの2択ではない」という理解に至っていた。

そして高齢者の価値観に触れる体験から、「大切な人を亡くして独りになったとしても前を向いて生きている」ということを知り、家庭訪問を開始する前まで学生は、高齢者は支援を必要としている人というネガティブなイメージを持っていたが、「結婚の話を投げかけたら、逆に聞き返されて、女性も多様な生き方を選べる時代だと言われた」などと、高齢者を支援するものと思っていた学生にとっては、逆に教えを授かるような面食らうこ

とも経験しながら、学生の高齢者に対するイメージは少しずつ変わっていった。Iwasakiら⁷⁾は、地域住民である高齢者らを対象とした大分県立看護科学大学における予防的家庭訪問実習の報告から、高齢者との交流を通して、学生らが高齢者におけるウェルネスということの実際や、そうした高齢者の生活を支える近隣地域の在り方へと学びが広がっていくことを報告している。患者としてではなく、地域に暮らす市民としての高齢者の暮らしの実際を適切に理解することは、看護専門職を目指す学生にとっては特に重要である。日本看護協会の2025年に向けた看護の将来ビジョン⁸⁾において、これからの看護師の重要な資質として、「疾病をみる『医療』の視点だけでなく、生きていく営みである『生活』の視点をも持って人を見ること」が提案されている。奥村ら⁹⁾も援助職がそれぞれに持つ高齢者観は、サービスの質に影響することを報告している。学生は4回の家庭訪問を重ねた試行錯誤を通して対人支援の難しさを実感しながらも、手ごたえや達成感も味わうことができていた。本プロジェクトのような課外活動を通して、学生の臨床経験を補い、対人支援における成功体験を積むことは、看護専門職の養成においても有益であると推察される。

最後に2ペアでのチームワークの醸成について考察する。ある学生は、「私は話を聞くので精一杯だったので、Aさんがよく話していて、すごいなと思った」と、仲間に対する尊敬の気持ちを語っていた。学生には、それぞれに得意、不得意な面があるが、授業におけるグループレポートのように役割分担とその責任を問われるような課題も無く、安心して取り組める状況設定の中で育まれたチームワークであったと推察される。大分県立看護科学大学の取り組み¹⁰⁾では、チームは4学年から構成され、4人1チームで家庭訪問が実施されているという。そのため、下級生は上級生の技術レベルの高さを目の当たりにして尊敬し、上級生は下級生の学修段階を考慮した役割を配したり、補助したりしながらチームワークを形成し、リーダーシップを学んでいる⁷⁾という。本学においても学年間の縦のつながりをいかにして醸成していくかは課題の一つである。今回のプロジェクトは、COVID-19の影響もあり、試行的な取り組みに終わってしまったが、今後は、地域貢献を通して学生間の交流の活性化にも貢献できるようなプロジェクトとなることを期待したい。

2) 高齢者におけるプロジェクトの意義

本プロジェクトは参加した高齢者にとって、団地での普段の生活では出会うことがない看護学生との交流を提供した。家庭訪問の回数を重ね、お互いの信頼関係が深まるにつれて、高齢者にとっては次の訪問を楽しみにする生活の張り合いと生きがいの創出につながっていた。高齢者にとって、普段の生活における交友関係は同世代の人々の範囲に留まり、他世代との交流の機会は少ない。そのような中で学生との交流は、単に他者との会話の機会を得ただけでなく、【学生の訪問から、高齢者との交流では得られない未来志向性を得た】という効果があった。斎藤ら¹¹⁾は、公的賃貸住宅に暮らす高齢者において、人とのつながりなど豊かな社会関係資本を持つことが、抑うつリスクを下げることを報告している。これから社会に羽ばたこうとする清々しい学生の姿は高齢者にとって新鮮で、その気持ちも明るくしてくれるポジティブなつながりであったと推察される。

また学生との面談を通して高齢者に力がみなぎり、過去に行っていたことに再挑戦してみたり、それまで躊躇していたことに挑戦してみようという気力が湧いたり、【学生との交流は、私の生きがいを思い出させてくれた】という効果もあった。木村ら¹²⁾は、高齢者の抑うつに影響する要因の一つとして、生きる意欲の重要性を挙げている。学生との交流は、高齢者にとってその健康を支える、生きる意欲の再生にも貢献していたと考えられる。

また高齢者は、本プロジェクトに参加したことについて、【次の時代を担う若者の成長に貢献する機会が持てて嬉しい】と捉えていた。「私にもまだ役割がある」という感覚や「世の中のためになることをしている」というような自身の存在意義を自認することもまた、高齢者の抑うつと(予防的に)関連がある¹²⁾という。このような成果は、若者である学生との交流だからこそ生まれた関係性にもとづくものであり、まさに大学の強みを生かした地域貢献であったと言える。プロジェクトを終えて学生が命名した「教えて人生の先輩」プロジェクトとは、実的に的を射るタイトルであった。

本プロジェクトは極小規模での実施ではあったが、先行事例としては藤田医科大学とUR都市機構との連携・協力による地域医療福祉拠点化事業など先駆的な事例¹³⁾も報告されている。本研究の成果は、大学による地域貢献の可能性として、ハー

ド面よりも、そこに集う人々におけるソフト面の効果を明らかにしたところにある。今後はこの成果を1つのモデルとして、市内の各地域との連携のもとで、地域のケアシステム構築に貢献する活動としてこのプロジェクトを育てていきたい。

本研究の解釈において留意しておく点として、参加した学生は2人とも4年生であったこと、またプロジェクトが実施された2020年度は、COVID-19のために保健師の実習はすべて学内実習となり、市民と直に接して支援する体験ができなかった学年であったことが挙げられる。そのため、今回のプロジェクトは保健師を目指す学生にとって、特に新鮮であり、学習の到達レベルにも影響していた可能性がある。また各回の訪問(面談)には教員が同席しており、その状況を詳細に把握できたことは本研究の強みではあるが、例えば、「教員と高齢者との会話の様子をみて学んだ」のように、このことによる結果への影響も否めない。以上のことは本研究の限界として留意しておく必要がある。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたりご協力を賜った関係機関および市民の皆様にご心よりお礼申し上げます。UR都市機構北海道エリアの小澤 唯幸様、谷 将宏様、松川 渉平様には、本プロジェクトの実施に向けた打ち合わせ、団地自治会との懇談会等において多大なご協力とご尽力を賜りました。また、国立保健医療科学院の茂木(岩崎)りほ先生には、大分県立看護科学大学の実践例をもとに貴重なご助言を賜りました。心よりお礼申し上げます。

本研究は、2020年度札幌市立大学共同研究費の助成を受けて実施した成果の一部です。

注

(1)アウトリーチ：outreachとは、「手を伸ばす行為」という意味から派生して、「福祉サービスなどを通常の範囲を超えて行うこと」と和訳される。特に保健医療福祉の分野においては、「困難を抱えながらも支援の必要性を自覚していない、相談意欲がない、支援拠点に足を運ばない人々に対して、行政関係機関や支援者の側から働きかけること、手を差し伸べること、あるいはその実態を把握して対策につなげること」を意味して用いられる用語である。

(2)ウェルネス：米国の公衆衛生専門医 Helbert L. Dunn は、身体的・精神的・社会的に良好な状態(well-being)をさらに積極的に解釈して、「まったくの健康で輝くように生き生きとしている状態」と呼び、「個人がもつ潜在能力を最大限に生かす機能を統合したもの」と定義した¹⁴⁾。例えば、疾病などがあっても、その人なりに輝くように生き生きと暮らす人々の姿であり、そうした状態の実現に向けて取り組む生き方の目標のようなものである。看護においては、疾病等の原因や要因を追求して、それを除去することで回復を目指すような問題解決志向に対峙する概念としてウェルネス志向という用語が用いられることもある。加齢によるものや現代医学では治療できない病なども多くあり、問題解決志向には限界がある。ウェルネスはすべての人々がもつ強みであり、ウェルネス志向の看護は、普遍的に有効でかつ必要なケアでもある。

文献

- 1) 藪谷祐介, 山田信博, 林 匡宏: 高経年団地におけるコミュニティ支援方策検討のための実証実験「あけぼのテラス」- 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その3. 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸): 1231-1232, 2019
- 2) 藪谷祐介, 山田信博: 拡張型団地コミュニティ形成に向けた実証実験「第2回あけぼのテラス」- 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その5. 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東): 247-248, 2020
- 3) 山田信博, 藪谷祐介, 林 匡宏: 高経年団地のコミュニティ支援を目的とした実証実験の評価と考察- 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その4. 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東): 1233-1234, 2019
- 4) 川田智美, 木村由美子, 木暮深雪, 小林三重子, 林元子, 狩野太郎: 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面. 群馬保健学紀要 26: 133-140, 2006
- 5) 細川満子, 千葉敦子, 山本春江, 三津谷 恵, 山田典子, 今 敏子, 工藤久子, 玉懸多恵子, 鈴木久美子, 古川照美, 桐生晶子, 櫻田和子: 教員が考える在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態度- 青森県看護教育研究会地域看護学グループの取り組み-. 青森県立保健大学雑誌 9(2): 159-165, 2008
- 6) 山田信博, 藪谷祐介: 拡張型団地コミュニティ形成に向けた実証実験の評価と考察. 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東): 249-250, 2020
- 7) Iwasaki R., Hirai K., Kageyama T., Satoh T., Fukuda H., Kai H., Makino K., Magilvy K., Murashima S.: Supporting elder persons in rural Japanese communities through preventive home visits by nursing students: A qualitative descriptive analysis of students' reports. Public Health Nursing 36(4): 557-563, 2019

- 8) 公益社団法人日本看護協会：2025年に向けた看護の挑戦「看護の将来ビジョン」いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護。 <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>(2022年9月26日)
- 9) 奥村由美子, 久世淳子：高齢者のイメージに関する文献研究—一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ—。日本福祉大学情報社会科学論集 11：57-64, 2008
- 10) 影山隆之, 緒方文子, 篠原 彩, 村嶋幸代：看護学生による高齢者への予防的家庭訪問実習。保健師ジャーナル 75(3)：238-244, 2019
- 11) 斎藤 民, 近藤尚己：高齢化する大規模団地での保健活動—そのチャンスと課題。保健師ジャーナル 75(10)：816-821, 2019
- 12) 木村裕美, 西尾美登里, 古賀佳代子：地域で生活する高齢者のうつ状態と関連要因。日本農村医学会雑誌 70(4)：325-333, 2021
- 13) 山澤 正：UR都市機構の取り組み—団地の地域医療福祉拠点化。保健師ジャーナル 75(10)：839-844, 2019
- 14) 奈倉道隆：高齢者のウェルネスを支援する医学カウンセリング。心身医学 50(3)：187-194, 2010